かがわ文化芸術祭2013参加公演

情熱と幻想

TAKAMATSU SYMPHONY ORCHESTRA
Since 1951

高松交響楽団
第111回定期演奏会

2013 12.15 日
開演14:00

香川県県民ホール
[アルファあなぶきホール]
大ホール

主催／高松交響楽団（TSO）
共催／かがわ文化芸術祭実行委員会
（公財）置県百年記念香川県文化芸術振興財団
香川県

Greeting ごあいさつ

皆様、ようこそお越し下さいました。

今回の定期演奏会では、スペイン･フランスと西欧の２つの国の作曲家を取り上げ、前半では、スペインの作曲家ファリャによる、スペイン舞踊音楽の民族色とヨーロッパ芸術音楽を融合させた生気に溢れる傑作バレエ音楽「三角帽子」、そして、後半では、フランスの作曲家ベルリオーズによる、作曲者自身が、自らの恋にかけた狂おしいほどの情熱を、独自の色彩的な管弦楽法で大胆に描きあげた大作「幻想交響曲」の２曲を演奏します。指揮者には、日本国内はもとより、ハンガリー・ソルノク市の音楽監督を務めるなど、国際的活躍も目覚ましい俊英、井崎正浩氏を、当団としては初めてお迎えしました。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

Program プログラム

バレエ音楽「三角帽子」より 第１組曲・第２組曲（M.ファリャ）

マヌエル・デ・ファリャ
（1876 ～ 1946）

スペインにまつわるクラシック曲というと、何が思い浮かぶでしょう。ビゼーの「カルメン」、シャブリエやラヴェルの「スペイン狂詩曲」、リムスキー＝コルサコフの「スペイン奇想曲」等たくさんありますが、これらは外国の作曲家がスペインをテーマに作曲したものであり、「生粋のスペイン人」が作曲したクラシック音楽というと、そう多くはなく、本格的な大作曲家の登場は、19 世紀後半を待たねばなりませんでした。そんな中のひとりがファリャであり、その代表作がバレエ音楽「三角帽子」です。題名の「三角帽子」とは、物語の悪役となる代官が、権威の象徴として被っている三本の角のある帽子の事を指します。スペインのアラルコンの同名の小説を原作にバレエ化したものです。振付は当時の花形ダンサーであるレオニード･マシーン、舞台装置と衣装を担当したのは、かの有名なピカソだったそうです。ファリャを含む一流の芸術家達によって上演されたこのバレエの初演は大成功でした。

物語の舞台は、ファリャ自身の出身地でもあるスペイン西南のアンダルシア。

筋書きは、「好色な悪代官は通りすがりに水車小屋で粉引きをする粉屋の妻に一目惚れ。様々な策で自分のものにしようと企むが、しっかり者の妻は主人の助けも借りて、それを何とか退ける。」というコメディです。

フラメンコ、セギディーリャ、ファルーカ、ホタ、と、スペインの民族舞踊にまつわる躍動感のある見事な音楽でバレエ音楽は構成されています。

第１組曲は、バレエ第１幕から次の曲が選ばれ、ほぼ休みなく続けて演奏されます。

序奏～午後　ティンパニとトランペット、ホルンだけの素朴な序奏でアンダルシアへと誘い、昼下がりの水車小屋と町の様子を伝えます。

粉屋の妻の踊り　小屋をのぞく代官に気付かずフラメンコを踊り出す妻。これぞスペインという曲です。

代官～粉屋の妻　たまらずにのこのこと姿を現す代官はファゴットのユーモラスなソロ。気付いた妻はぶどうの房を代官に差し出します。ゆっくりしたやわらかい音楽は妻の様子を示します。

ぶどう　ぶどうを受け取った代官は妻を追いかけますが、トランペットが巡査の登場を示し、帰宅した夫も加わって再びフラメンコを踊ります。

第２組曲は、第２幕から次の曲が選ばれています。

隣人達の踊り　聖ヨハネ祭の祝宴に集まった粉屋の近所の人たちがおどる三拍子の「セギディーリャ」。

粉屋の踊り　人々にうながされて踊り出す粉屋。最後は次第に速度を上げて熱狂します。「ファルーカ」という舞曲です。

終幕の踊り　最後で代官をこらしめた人々が、彼に似せた藁人形を放り上げて踊る祭りの音楽「ホタ」。終幕にふさわしい賑やかで楽しい音楽です。

幻想交響曲　(E.ベルリオーズ)

エクトル・ベルリオーズ
(1803 – 1869)

1830年のフランス・パリ。そこでは、一人の若い作曲家の作品が人々を熱狂させていました。若い作曲家とは鬼才「ベルリオーズ」であり、作品とは「幻想交響曲」です。ベルリオーズは、「自身の失恋体験」という個人的な事を作曲の素材に取り上げ、この交響曲を作曲しました。「気高く崇高な音楽」で隣国ドイツ中を熱狂させた楽聖ベートーヴェンが1827年にこの世を去ってからわずか3年後のことです。ベルリオーズは、この曲で、舞台袖での演奏を導入し、演劇的、立体的演奏効果を上げるとともに、管弦楽の規模も、当時の標準から大幅に増大させ、ベートーヴェンが交響曲に導入したピッコロやトロンボーンはもちろん、イングリッシュホルン、コルネット、オフィクレイド（現在のチューバに相当）、ハープ、鐘、ずらりと並んだ打楽器群、と新しい楽器をふんだんに導入し、視覚的・音量的にも大迫力のサウンドを作り出したのです。

さて、ベルリオーズが恋した女性、それは「スミッソン」というスター女優でした。彼は様々な方法で彼女にアプローチしますがうまくいかず、彼女を惹きつけるべくこの交響曲の作曲を始めたわけですが、彼の恋はその時には実ることはありませんでした。この曲は、そんな失恋経験をした自身とスミッソンがモデルになっています。曲中には「スミッソンのテーマ（作曲者自身は「固定観念」と名付けた）」が頻繁に登場します。これは、第1楽章では、序奏を終え、快速な主部に入ったところでヴァイオリンとフルートによって奏でられます。2楽章以降ではクラリネット等、木管楽器を中心に演奏されますので、どのように変容していくかについても耳を傾けてみてください。

この曲をより深く知るために、大きな手掛かりとなる資料として、ベルリオーズ自身が書き残し、自分が演奏する際に聴衆に配布していた曲目解説がありますので、ここに紹介させていただきます。「悪趣味」のすれすれのところで、万人の心を捉えて離さない強烈で鮮やかな色彩を放つ彼の音楽世界の一端が分かる事でしょう。

病的な感受性と激しい想像力に富んだ若い音楽家が、恋の悩みによる絶望の発作から服毒自殺を図るが、死に至らしめるには足りず、彼は重苦しい眠りの中で一連の奇怪な幻想を見、その中で感覚、感情、記憶が、彼の病んだ脳の中に観念となって、そして音楽的な映像となって現われる。愛する人その人が、一つの旋律となって、そしてあたかも固定観念のように現われ、そこかしこに見出され、聞えてくる。

第1楽章「夢、情熱」 *彼はまず、あの魂の病、あの情熱の熱病、あの憂鬱、あの喜びをわけもなく感じ、そして、彼が愛する彼女を見る。そして彼女が突然彼に呼び起こす火山のような愛情、胸を締めつけるような熱狂、発作的な嫉妬、優しい愛の回帰、厳かな慰み。*

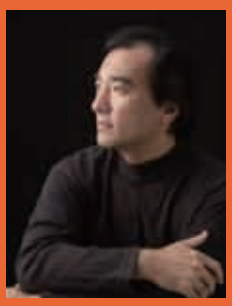
第2楽章「舞踏会」 *とある舞踏会の華やかなざわめきの中で、彼は再び愛する人に巡り会う。*

第3楽章「野の風景」 *ある夏の夕べ、田園地帯で、彼は2人の羊飼いが「ランツ・デ・ヴァッシュ（アルプス地方の牧歌）」を吹き交わしているのを聞く。牧歌の二重奏、その場の情景、風にやさしくそよぐ木々の軽やかなざわめき、少し前から彼に希望を抱かせてくれているいくつかの理由［主題］がすべて合わさり、彼の心に不慣れな平安をもたらし、彼の考えに明るくのどかな色合いを加える。しかし、彼女が再び現われ、彼の心は締めつけられ、辛い予感が彼を突き動かす。もしも、彼女に捨てられたら…… 1人の羊飼いがまた素朴な旋律を吹く。もう1人は、もはや答えない。日が沈む…… 遠くの雷鳴…… 孤独…… 静寂……*

第4楽章「断頭台への行進」 *彼は夢の中で愛していた彼女を殺し、死刑を宣告され、断頭台へ引かれていく。行列は行進曲にあわせて前進し、その行進曲は時に暗く荒々しく、時に華やかに厳かになる。その中で鈍く重い足音に切れ目なく続くより騒々しい轟音。ついに、固定観念が再び一瞬現われるが、それはあたかも最後の愛の思いのように死の一撃によって遮られる。*

第5楽章「魔女の夜宴の夢」 *彼はサバト（魔女の饗宴）に自分を見出す。彼の周りには亡霊、魔法使い、あらゆる種類の化け物からなるぞっとするような一団が、彼の葬儀のために集まっている。奇怪な音、うめき声、ケタケタ笑う声、遠くの叫び声に他の叫びが応えるようだ。愛する旋律が再び現われる。しかしそれはかつての気品とつつしみを失っている。もはや醜悪で、野卑で、グロテスクな舞踏の旋律に過ぎない。彼女がサバトにやってきたのだ…… 彼女の到着にあがる歓喜のわめき声…… 彼女が悪魔の大饗宴に加わる…… 弔鐘、滑稽な怒りの日のパロディ。サバトのロンド。サバトのロンドと怒りの日がいっしょくたに。*

Profile



指　揮　井﨑　正浩　*Masahiro Izaki*

1960 年福岡出身。福岡教育大卒、東京学芸大大学院（修士）修了。ウィーン音楽大学に文部省派遣留学。指揮を故安永武一郎、故 C. エスターライヒャー、G. トイリング、湯浅勇治、故遠藤雅古、伊藤栄一の各氏に師事。'95 年ブダペスト国際指揮者コンクール優勝。'05 年より九州室内管弦楽団首席指揮者に就任する等、国内の主要オーケストラで活躍するほか、ヨーロッパ各地、特にハンガリーに拠点を置き活動。サヴァリア響芸術監督を経て '07 年からソルノク市音楽総監督に就任。これは同市に所属する音楽文化団体の活動や施設運用を総括するものであり、日本人からの異例の抜擢で大きな話題を呼ぶ。'09 年にはソルノク市響を率いて初来日公演を行った。こうしたハンガリーにおける活動が認められて、News Week 日本版（'09 年 7 月）にて、「世界が尊敬する日本人～文化の壁を超え異国で輝く天才・鬼才・異才 100 人」に掲載される等、今後の発展が大いに期待される指揮者。

コンサートマスター　福崎至佐子　*Hisako Fukuzaki*

東京藝術大学音楽学部器楽科卒業。ヴァイオリンを故 神崎初美、故 巖本眞理、故 岩崎洋三、ボヤン・レチェフ、徳永二男に、室内楽を故 ルイ・グレーラーの各氏に師事。日本フィルハーモニー交響楽団を経て 1972 年、新日本フィルハーモニー交響楽団アシスタントコンサートマスターに就任。コンサートマスターのルイ・グレーラー氏と弦楽四重奏を組みＴＶ、ＦＭ東京、ＣＭ、映画音楽、レコーディングに活躍する。1985 年、高松に帰郷し、ゴールドブレンドコンサート、四国二期会オペラ、四国学院大学メサイア演奏会などでコンサートマスターをつとめる。現在、高松大学発達科学部教授。香川大学教育学部講師。かがわジュニア・ニューフィルハーモニック・オーケストラ音楽監督。高松交響楽団常任コンサートマスター。新日本フィルハーモニー交響楽団団友。公益社団法人日本演奏連盟会員。日本クラシック音楽コンクール・全四国音楽コンクール・山陽学生音楽コンクール等審査員。平成 13 年度「香川県教育文化功労者表彰」、第 42 回「四国新聞文化賞」、平成 16 年度「香川県文化功労者表彰」受賞、第 67 回「山陽新聞賞（文化功労）」受賞。平成 21 年度地域文化功労者文部科学大臣賞受賞。2011 年 1 月、日本クラシック音楽協会第 20 回優秀指導者賞受賞。

管弦楽　高松交響楽団　*Takamatsu Symphony Orchestra*

1951（昭和 26）年 8 月、故 緒方益圀氏が県内の有志を募って創立。同年 11 月香川県公会堂において第 1 回定期演奏会を開催し、高松に初めてオーケストラの灯を燈す。爾来、半世紀以上に亘る活動を続け、2011 年に創立 60 周年を迎えた。これまで 100 回を超える定期演奏会をはじめ、県内外での特別演奏会、青少年を対象にした音楽教室の実施、香川県県民ホール開館 20 周年記念オペラ「蝶々夫人」全幕公演（2008 年）、サンポートホール高松開館 5 周年記念「カルミナ・ブラーナ（バレエ付き）」公演（2009 年）をはじめ、オペラ・バレエ等の他団体や地元音楽家との共演など地域に深く根ざした幅広い活動を積み重ねている。2001 年に迎えた創立 50 周年を機に新たな半世紀に向けた取り組みとして、高響団員を中心に新たに編成された「コレギウム・ムジクム高松」、「高松オペラシティ・オーケストラ」などの多面的なオーケストラ活動を展開している。さらには 2001 年より香川県の主催事業となった「かがわジュニア・ニューフィルハーモニック・オーケストラ（KJO）」、2003 年 1 月に設立された「丸亀シティフィルハーモニックオーケストラ（MCO）」への演奏・運営面での全面協力など、地域音楽文化の核ともいえる重要な役割を担う香川のマスター・オーケストラとして様々な取り組みを行っている。1987 年、地方文化の発展に大きく貢献した功績から音楽団体として四国で初めての「地域文化功労者表彰」を文部大臣より受賞。2008 年、香川県より栄えある第 1 回「文化芸術選奨」を受賞。現在、オーケストラの団員数は、約 150 名。